令和７年５月９日(金)

弥生時代中期頃に荻島地区(越谷市)を流れた利根川 No.1

NPO法人越谷市郷土研究会
秦野 秀明

出典に基づき
読み解いていきます

NPO法人越谷市郷土研究会
秦野 秀明

出典：

柿沼 幹夫(2025)

『さいたま市史 通史編 原始・古代Ⅱ』

さいたま市

pp. 2-7, 19-26

より引用

出典：

笹森 紀己子(2025)

『さいたま市史 通史編 原始・古代Ⅱ』

さいたま市

pp. 12-13, 29-31

より引用

弥生時代とは
弥生時代の時期区分

出典：

笹森 紀己子(2025)

第一章 弥生時代

第一節 弥生時代とは

pp. 12-13

より引用

笹森 紀己子(2025)
1/3

早期

紀元前一〇世紀後半～紀元前八世紀

北部九州地方で水田稲作が開始される。

前期

紀元前八世紀前半～紀元前四世紀前半

前期前半に近畿地方から東海地方北部まで水田稲作が連続的に波及。

点的には前期末までに東北地方北部に達する。

笹森 紀己子(2025)
2/3

中期
紀元前四世紀後半～紀元前一世紀

北部九州地方で王墓が出現し、近畿地方で大型拠点集落が造られた。

西日本で鉄器・青銅器が使用された。

南関東地方では水田稲作が定着し、環濠集落や方形周溝墓が営まれるようになる。

笹森 紀己子(2025)
2b/3

中期
紀元前四世紀後半～紀元前一世紀

地域：さいたま市

時代区分：中期前半　→　土器型式：岩櫃山式
：中期中葉　→　：池上式
：中期後半　→　：宮ノ台式

笹森 紀己子(2025)
3/3

後期
一世紀～三世紀前半

鉄器が普及し、青銅器祭祀は終焉する。
西日本では楯築墳丘墓（岡山県倉敷市）のような大型弥生墳丘墓が築かれる。
関東地方では北武蔵・南武蔵などの地域的まとまりが明確化してくる。[略]
本書では定型化した大型前方後円墳（箸墓古墳、奈良県桜井市）の出現をもって古墳時代前期とし、その前段階を弥生時代後期末として扱う。

笹森 紀己子(2025)
3b/3

後期
一世紀～三世紀前半

地域：さいたま市

時代区分	：後期前半	→	土器型式	：／
	：後期中葉	→		：下戸塚式
	：後期後半	→		：弥生町式
	：後期末	→		：前野町式

縄文時代後期から古墳時代の利根川と渡良瀬川水系の河道

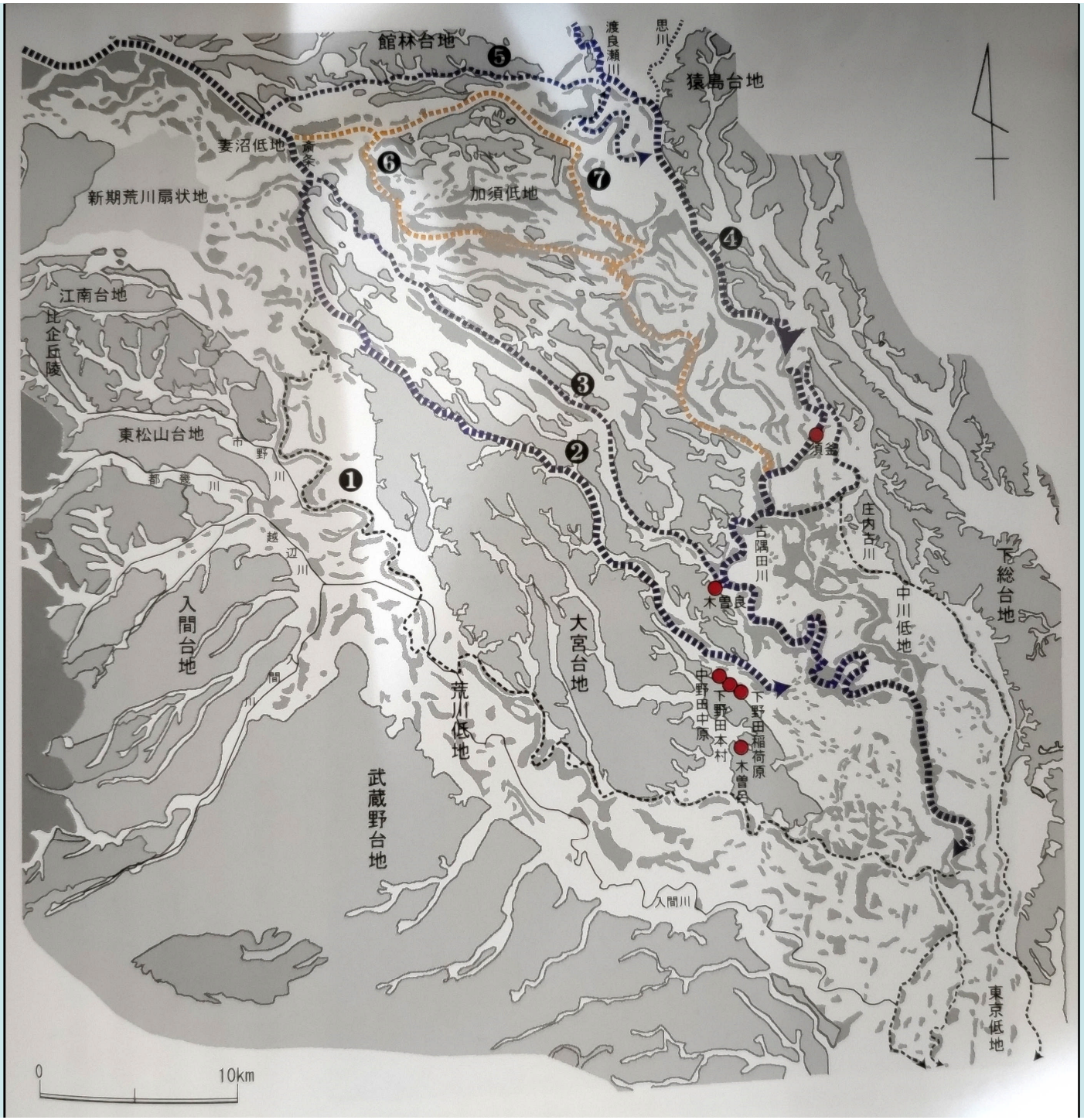
出典：

柿沼 幹夫(2025)

p. 24

図1-2-10

より引用


館林台地
渡良瀬川
思川
猿島台地
妻沼低地
斎条
新期荒川扇状地
加須低地
江南台地
比企丘陵
東松山台地
市野川
都幾川
越辺川
入間台地
入間川
荒川低地
武蔵野台地
大宮台地
須釜
古隅田川
庄内古川
木曽良
中野田中原
下野田本村
下野田稲荷原
木曽呂
中川低地
下総台地
入間川
東京低地
0
10km

縄文時代後期から古墳時代の利根川と渡良瀬川水系の河道

出典：

柿沼 幹夫(2025)

p. 24

図1-2-10

より引用

利根川の河道①②③
1/3

①妻沼低地から荒川低地

（～縄文時代後期初頭）

②元荒川～綾瀬川

（縄文時代後期～弥生時代中期頃か）

③星川～元荒川

（～古墳時代後期頃か）

利根川の河道④⑤
2/3

④渡良瀬川水系～古隅田川～元荒川
　～中川
　（～鎌倉時代）
⑤谷田川
　（渡良瀬川水系に合流）

利根川の河道⑥⑦
3/3

⑥会の川～古利根川～古隅田川～元荒川
　～中川
　（～古墳時代後期～近世初頭）
⑦浅間川（会の川に合流）

出典：

柿沼 幹夫(2025)

第一章 弥生時代

第一節 弥生時代のあらまし

pp. 2, 3

より引用

柿沼 幹夫(2025)
1/4

関東地方、とりわけさいたま市域の弥生文化の特性を語る際に、利根川の存在を忘れることはできない。

関東地方で本格的な水稲農耕社会が定着するのは弥生時代中期中葉（紀元前三～紀元前二世紀）で、列島内では最も遅い。

そして、北関東地方東部（栃木県・茨城県・千葉県北縁）へ農耕文化複合が拡大していくことはなかった。

利根川河道が拡大を阻んだためである。

柿沼 幹夫(2025)
2/4

利根川は、当時、連続的につながっていた館林-大宮台地の近傍を流下しており、元荒川・綾瀬川筋も利根川河道の一つをなしていた。

群馬県東部を横断する谷田川も利根川河道の一つで、渡良瀬川と合流して館林から大宮台地東縁に沿って中川低地を流下し、東京湾に注いでいた。

柿沼 幹夫(2025)
3/4

利根川は関東地方の中心を貫流する大河であり、弥生時代を通じて①から⑥まで列挙したような西日本型弥生文化の北方から東方への拡大の障壁となった。

大宮台地の東縁に沿った本市域にもな西日本型弥生文化が到着したが、その文化の果てる所であった。

柿沼 幹夫(2025)
4/4

その北関東地方東部は、東北地方南部との関わりが深い地域で、弥生時代には環濠集落や方形周溝墓が造られることはなかった。同時に、本市域の東限をなす元荒川-綾瀬川流域は東北型弥生文化との接触地域であり、東北地方南部から北関東地方東部の土器の出土事例が目立っている。

以上のような、弥生時代におけるさいたま市域の地政学的な位置付けを念頭に、以下、節ごとに概略を述べる。

出典：

柿沼 幹夫(2025)

第一章 弥生時代

第二節 弥生時代とは

三・弥生時代の利根川・荒川

弥生時代の利根川・荒川

pp. 22-25

より引用

柿沼 幹夫(2025)
1/7

縄文時代後期以降、流れを変えた利根川の新たな流路の一つとされているのが綾瀬川筋である。

綾瀬川の現在の起点は桶川市小針領家付近であるが、それは慶長年間（一五九六～一六一五）に関東郡代の伊奈備前守忠次が「備前堤」と称される人工堤を築き、川の流れを切り離した時に始まる。

その目的は、下流地域の水田開発と荒川からの洪水を防ぐことにあった。

「備前堤」付近
1/

秋葉 一男(1987)(注1)
松浦 茂樹(1989)(注2)同(2018)(注3)における
「元荒川」の「備前堤」より下流側の
「開削説」において注意すべき点
①旧下栢間村(現久喜市)・旧高虫村(現蓮田市)間の
「台地の開削」だけではなく
②更に下流側の
「沼沢地の開削」を含めて
「元荒川」を「星川」へ合流させた事

「備前堤」付近
2/

出典：

(注1)

秋葉 一男(1987)『荒川 人文Ⅰ-荒川総合調査報告書-』
埼玉県 pp.370-373

(注2)

松浦 茂樹(1989)『国土の開発と河川』鹿島出版会 p.66

(注3)

松浦 茂樹(2018)「綾瀬川の歴史と現状」『水利科学』62巻1号
日本治山治水協会 pp.28-71

添付図

地理院地図(電子国土Web)「治水地形分類図」

「備前堤」付近
3/

現在の「野通(やどおり)川」は
旧「小林沼」跡の低地から
南側の「台地」を「開削」し
更に旧「栢間沼」跡の低地を「経由」し
「元荒川」に合流
ゆえに
①「野通川」の「最下流部」
及び
②「星川」合流部までの「元荒川」も
「開削」したと推定可能

出典：秋葉 一男(1987)『荒川 人文Ⅰ-荒川総合調査報告書-』埼玉県 pp.370-372

(2)元荒川流域の開発

近世初頭の荒川本流は、前項で述べた通り綾瀬川で慶長年間伊奈備前守の備前堤の築造後に現在の元荒川流路に変更された。

先述の通り、忠次は下栢間村(菖蒲町)と高虫村(蓮田市)との境界のローム層を掘り割って、小塚、柴山、荒井新田、下大崎諸村を経て篠津村(白岡町)の星川に綾瀬川(元荒川)上流を合流させた。

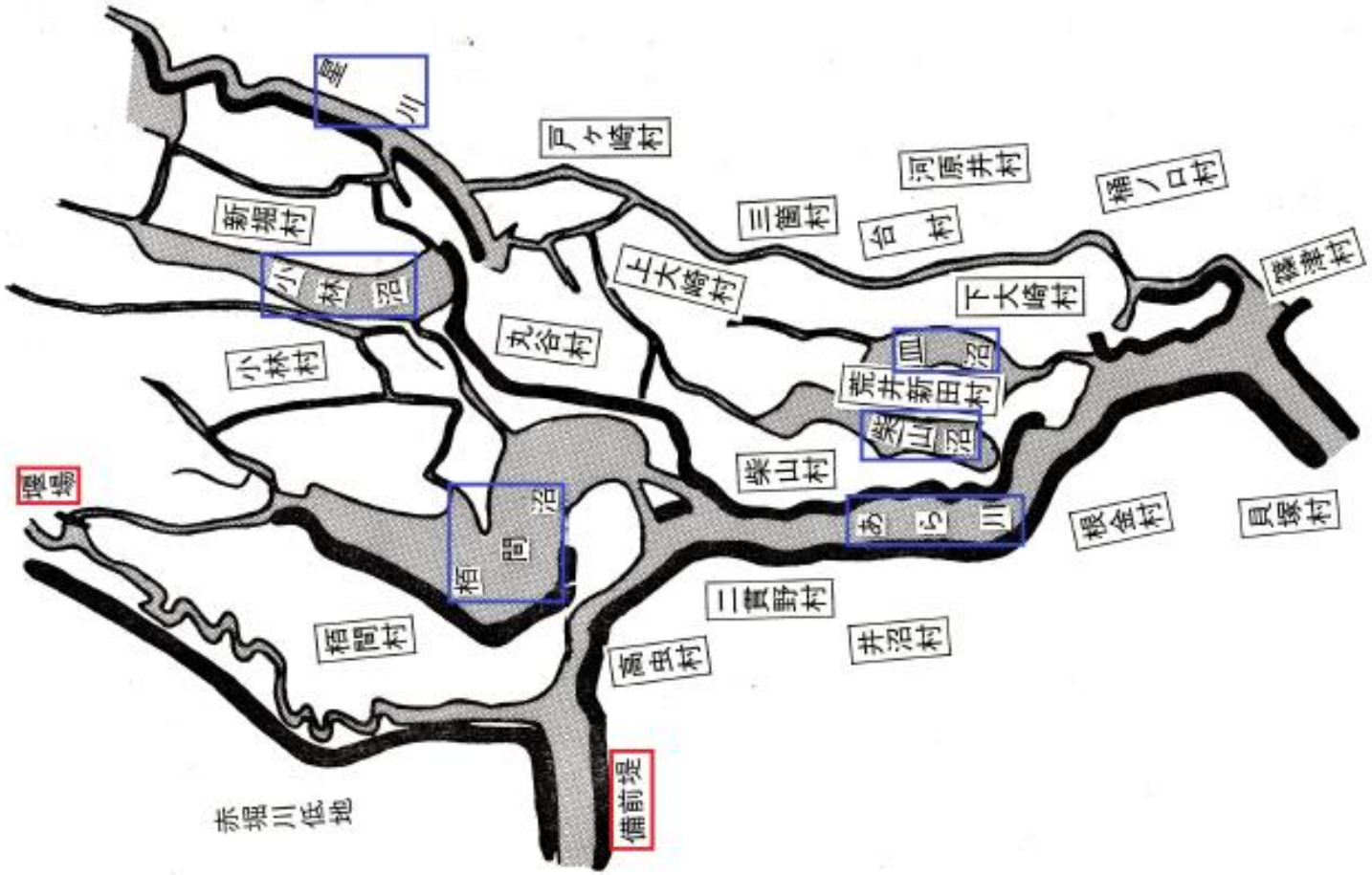
星川は成田堰水の残水を集めて南下し、元荒川の水位より高い場所を流下し、自然堤防もよく発達している。この流路は、菖蒲領に入って新堀村内で一部は前記篠津村を経て現元荒川筋を流下するが、その他は小林、栢間、皿、柴山の諸沼に流れ込み、沼沢地を形成していた。この諸沼は周辺地帯の用水源もさることながら洪水等の水量調整として利用されたのである。

「元禄年間菖蒲領星川・元荒川関係図」は白岡町、柴山の田口家の「かねの手堤」の裁許状の絵図をイラスト化したものであるが、当時の様子をよく表しているので参考とした。「あら川」とあるのは元荒川であり、一里四十八曲といわれる緩流の様子がよく描かれている。堤防は高低差のある方に設け洪水の際の被害を少なくしている。

また堤防は不連続堤であり、大洪水を考慮した溢越堤である。この訴訟は、1692年(元禄5)新堀村、小林村、栢間村3か村と丸山村と柴山村とが、この「かねの手堤」の堤防の置土について争ったものである。ここで問題にしたいのは、元荒川との関係である。

星川から注入するのは柴山沼、皿沼が主で、小林沼、栢間沼はここには記載されていないが後の野通川や元荒川の悪水が流下する。もっとも堰場が設けられ元荒川から直接取入れる様子がわかる。これらの諸沼は星川と荒川が合流する以前は全て柴山、皿沼に落ち込み、再び星川に合流した。前二沼も、流入する柴山、皿沼の沼域も、この図面よりも元ははるかに広かった。ところが伊奈備前守の元荒川の付替によって高虫村から根金村まで、新河道が開削されると「かねの手堤」によって、小林、栢間の二沼と縁が断ち切れ、柴山、皿沼の二沼の周辺が開発されるようになった。こうして慶長12年大崎村から荒井新田村が分離独立し、ついで大崎村は上、下2か村となったのである。

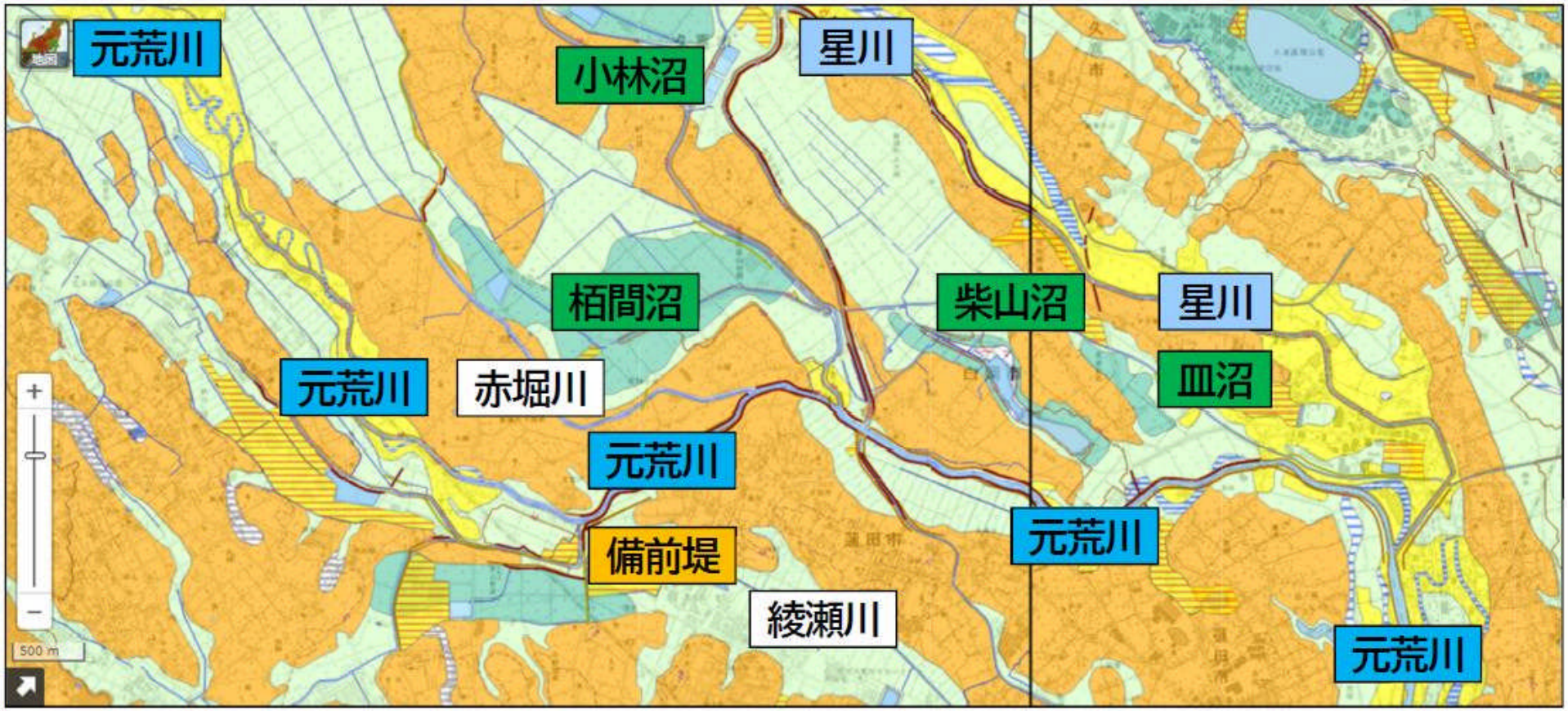
しかし、前術した通り、栢間、小林、皿、柴山の諸沼は洪水時の水量調節であったから、しばしば洪水に見舞われ、特に柴山、荒井新田、下大崎諸村の被害は大きかった。[後略]



出典：
秋葉 一男(1987)『荒川 人文Ⅰ-荒川総合調査報告書-』埼玉県 pp. 371
「第2図 菖蒲領星川元荒川関係図」
より加筆して左へ90度回転して引用

堤土置争論裁許状（田口家文書・市指定）

「第１章 白岡市の概要」p.30
https://www.city.shiraoka.lg.jp/material/files/group/31/31827174.pdf
より引用



出典：地理院地図(電子国土 Web)
https://maps.gsi.go.jp/
「治水地形分類図」より加筆して引用

綾瀬川低地の
利根川河道跡

出典：

柿沼 幹夫(2025)

p. 23

図1-2-9

より引用

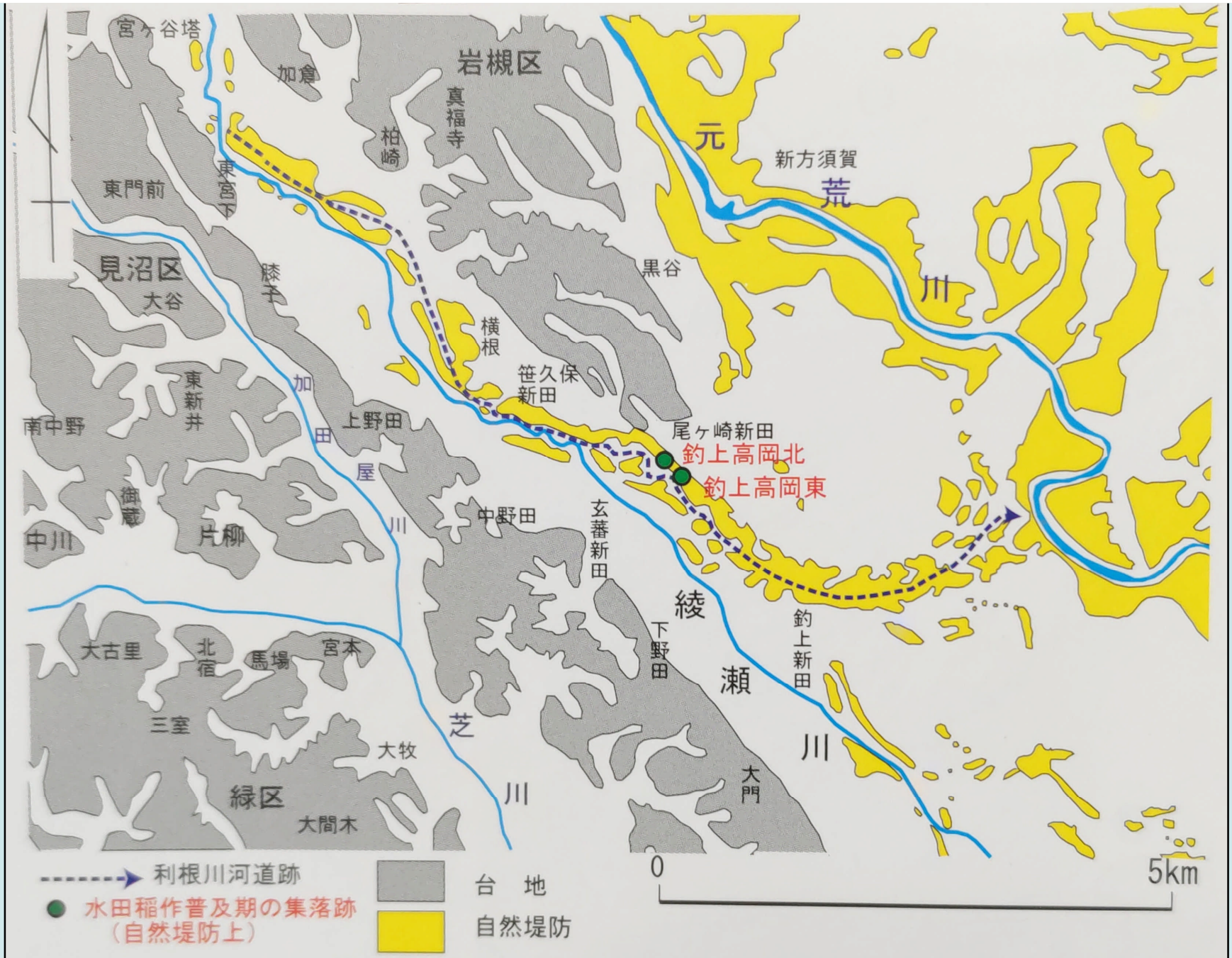


図1-2-9　綾瀬川低地の利根川河道跡

出典：

秦野 秀明(2018)

第490回 史跡めぐり

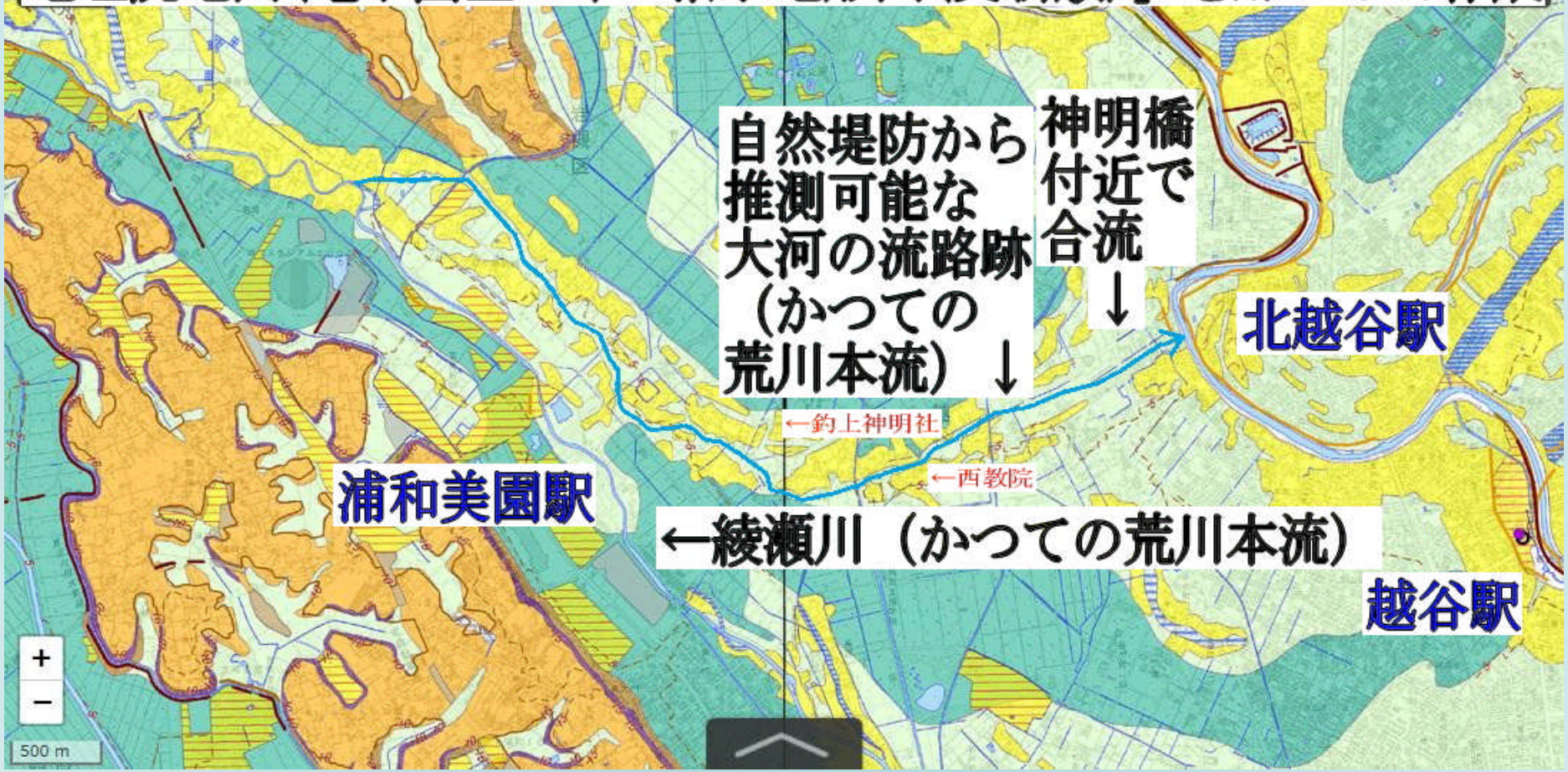
「岩槻区南東部とベトナム寺院」

https://koshigayahistory.org/

180527 490th s m .pdf

より引用

地理院地図(電子国土Web)「治水地形図(更新版)」を加工して作成



柿沼 幹夫(2025)
2/7

現在の綾瀬川の東側には、かつての河道を示す自然堤防が発達しており、弥生時代中期中葉から後半（紀元前二～紀元前一世紀頃）の集落跡が発掘調査されている（図1-2-9, 写真1-2-2）。

その一つ、岩槻区の釣上高岡北（かぎあげたかおかきた）遺跡の発掘調査に際して自然堤防を形成する地盤の地形・地質学的調査がなされた（注4）。

柿沼 幹夫(2025)
2b/7

(注4)

出典：

清水 康守ほか（2018）

「第六章　釣上高岡北遺跡の地形と地質」

山田 尚友 編（2018）

『釣上高岡北遺跡（第1次）』

さいたま市遺跡調査会報告書第183集

pp.49-57

柿沼 幹夫(2025)
3/7

その結果、旧流路跡の砂層中の炭化物の炭素14年代が縄文時代後期の年代を示し、礫種組成に安山岩礫を多く含んでいた。縄文時代後期に利根川により供給されたものであり、縄文時代晩期の河道の埋積を経て、弥生時代中期中葉には安定した表土化が進んで人々が進出し、農耕生活が展開された。

柿沼 幹夫(2025)
4/7

綾瀬川筋の利根川上流をたどると、桶川市小針領家から元荒川筋に入り、鴻巣市箕田付近で大宮台地西縁に沿った利根川流路跡に沿って発達して妻沼低地につながる。

妻沼低地は関東地方における稲作農耕開始期の中核地の一つである。

柿沼 幹夫(2025)
5/7

熊谷市・行田市の池上（いけがみ）・小敷田（こしきだ）遺跡群、熊谷市の前中西遺跡などの農耕集落が展開しているが、釣上高岡北遺跡から検出された遺構・遺物は妻沼低地と強い関連を示していた。

利根川が両地域を結び付け、川の道を利用した相互交流が行われたのである。

ただし、弥生時代後期（一世紀）になると周辺一帯から遺跡は姿を消してしまう。

柿沼 幹夫(2025)
6/7

近年、研究開発が著しい出土木材の年輪セルロース酸素同位体比を測定する降水量変動の研究によると、弥生時代中期末（紀元前一世紀）は湿潤期で洪水が繰り返された寒冷化の時代であったとされている（注5）。

利根川も洪水を繰り返したようであるが、後期（一～三世紀前半）の流路の状況はよくわかっていない。

寒冷化と洪水の多発は人々の生業の継続を不可能にし、本市とその周辺は後期中頃まで無人地帯と化していたようである。

柿沼 幹夫(2025)
6b/7

(注5)

出典：

中塚 武（2022）

『気候適応の日本史―人新世をのりこえる視点』

吉川弘文館

柿沼 幹夫(2025)
7/7

あるいは、弥生時代後期には利根川の流路ではなくなり、元荒川から綾瀬川筋は利根川から分離して独立河川となった荒川の河道となっていた可能性も考えられる。

そして、熊谷市から行田市西方を流れる星川から元荒川に通ずる流路（図1-2-10③）が利根川の一支流になっていたようである。

綾瀬川下流部の地形区分図

出典：

清水 康守ほか（2018）

「第六章　釣上高岡北遺跡の地形と地質」

山田 尚友 編（2018）

『釣上高岡北遺跡（第1次）』

さいたま市遺跡調査会報告書第183集

p.50 第38図

より引用

第38図　綾瀬川下流部の地形区分図 ×が釣上高岡北遺跡の位置

清水 康守ほか(2018)

出典：

清水 康守ほか（2018）

「第六章　釣上高岡北遺跡の地形と地質」

山田 尚友 編（2018）

『釣上高岡北遺跡（第1次）』

さいたま市遺跡調査会報告書第183集

pp.49-57

清水 康守ほか(2018)
1/3

縄文海進の後、ここに河川が流れ、標高−6mを超える河川の流路状の凹地が形成された。

これだけ深く浸食が進むためには、浸食基準面の海水面が現在の海水準よりかなり低くなっている必要がある。

日本列島の多くのところで、縄文時代後・晩期以降、寒冷化が進んでいることが知られている。

これが、海水面が現在の海水準よりかなり低くなった原因であろう。

清水 康守ほか(2018)
2/3

また、大きく浸食しただけでなく、細礫などを含む厚い砂層を堆積したのは、流量・流速も大きな河川が考えられる。

(3)で述べた利根川はこれにふさわしい河川といえる。

清水 康守ほか(2018)
3/3

岩槻区南部から越谷のこの地域は利根川の流路が埋積された後、その上に粘土質シルト層が堆積し、その後安定し表土化が進んだ。

ここに弥生時代中期の人が進出し、生活を展開した。

弥生時代以降、利根川は北西に移動し、西側の流路跡を流下していた。

この時の流路に、古墳時代以降と考えられる砂混じりの地層が堆積し、流路は埋め立てられていった。

縄文時代後期から古墳時代の利根川と渡良瀬川水系の河道

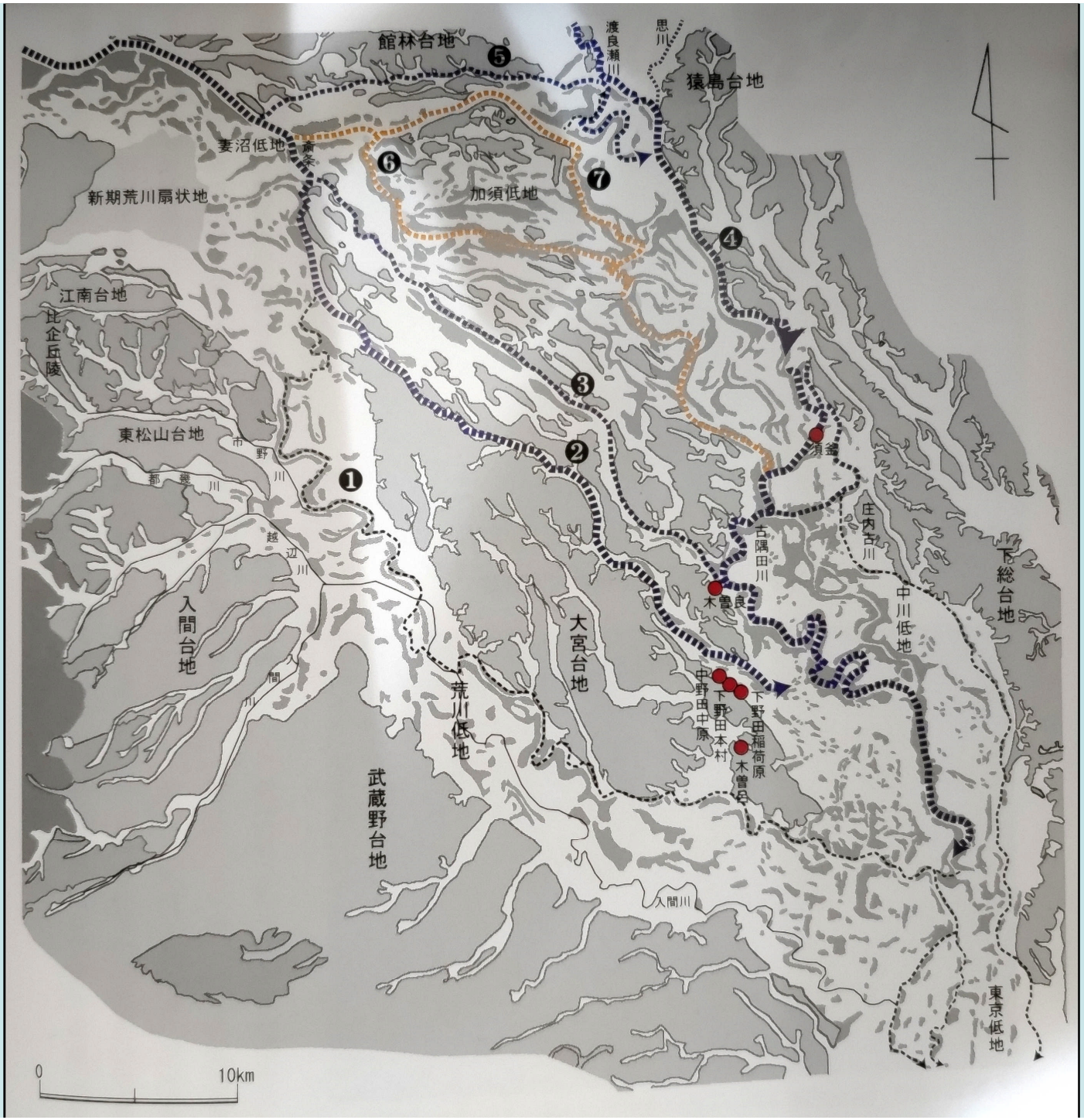
出典：

柿沼 幹夫(2025)

p. 24

図1-2-10

より引用


館林台地
渡良瀬川
思川
猿島台地
妻沼低地
斎条
新期荒川扇状地
加須低地
江南台地
比企丘陵
東松山台地
市野川
都幾川
越辺川
入間台地
入間川
荒川低地
武蔵野台地
大宮台地
須釜
古隅田川
庄内古川
木曽良
中野田中原
下野田本村
下野田稲荷原
木曽呂
中川低地
下総台地
入間川
東京低地
0
10km

出典：

柿沼 幹夫(2025)

第一章 弥生時代

第二節 弥生時代とは

三・弥生時代の利根川・荒川

中川低地の渡良瀬川水系

p. 25

より引用

柿沼 幹夫(2025)
1/2

大宮台地の東南端の岩槻区に接して流れる古隅田川から元荒川筋にも、弥生時代に渡良瀬川水系の大きな流路があった。
渡良瀬川は群馬県と栃木県との境にある皇海山に源を発し、桐生川、巴波（うずま）川、思川などの支流を合せて埼玉県内に入って庄内古川となる。
また、群馬県東南部地帯を横断する谷田川もこの頃の利根川の主要流路であり、現在の渡良瀬遊水池付近で渡良瀬川を合せていた可能性が高い。

柿沼 幹夫(2025)
2/2

利根川と合流して大河となった流れは、春日部市域で古隅田川から元荒川筋に入って岩槻区域に最接近し、越谷市東方（※東町（あずまちょう））付近で中川に合流する。
河道跡に沿った自然堤防上では、弥生時代中期中葉（紀元前二世紀頃）の墓地である春日部市須釜（すがま）遺跡が人々の痕跡がたどれる最初の遺跡である（注6）。
この流路が弥生時代を通じて大宮台地の東南端に接して流れていたと思われ、この河道を利用した水上交通による北関東地方や東関東地方との交流も盛んであったようである。[略]

柿沼 幹夫(2025)
2b/2

(注6)

出典：

長谷川 清一ほか（2003）

『須釜遺跡ー

　弥生時代中期の再葬墓群の調査と古環境の復元ー』

庄和町文化財調査報告第九集

庄和町教育委員会

出典：

笹森 紀己子(2025)

第一章 弥生時代

第二節 弥生時代とは

四・弥生文化におけるさいたま市の位置

農耕文化の最前線ーさいたま市

pp. 29-31

より引用

笹森 紀己子(2025)
1/3

関東地方南部は本州島内では最後に水田稲作が伝わった地域であるが、いったん始まった稲作は、寒冷な時期には遺跡数が減少したり、地域が限られたりしながらも続いたのである。一方、東北地方北部は、関東地方よりも早く水田稲作が伝わったが、弥生時代中期末の寒冷化した時期に水田稲作が行われなくなっている。[略]

笹森 紀己子(2025)
2/3

環濠集落は北部九州地方で弥生時代早期に出現し、弥生時代前期には西日本に広く普及し、関東地方では現在の利根川以西までは弥生時代中期後半に登場する。

しかし、それより北東は弥生時代を通じて環濠集落という集落形態を受け入れなかった地域であり、水田は存在するが環濠集落は造られず、集落も小規模である。[略]

笹森 紀己子(2025)
3/3

ともに水田稲作が行われているにもかかわらず、利根川以西と以北・以東では集落景観に大きな差がみられるのである（注4）。

このように、弥生時代を通じて環濠集落が利根川を越えて北東に広がることはなく、多くの住居跡が集中することもない。

[略]

このような状況の中で、より広く日本全体を見渡したに利根川以西で最東端にある埼玉県域は本格的弥生農耕社会の最前線であったといえる。

笹森 紀己子(2025)
3b/3

(注4)

出典：

石川 日出志（2001）

「東日本の環濠集落」『弥生時代の集落』

大阪府立弥生文化博物館編

学生社

出典：

笹森 紀己子(2025)

第一章 弥生時代

第二節 弥生時代とは

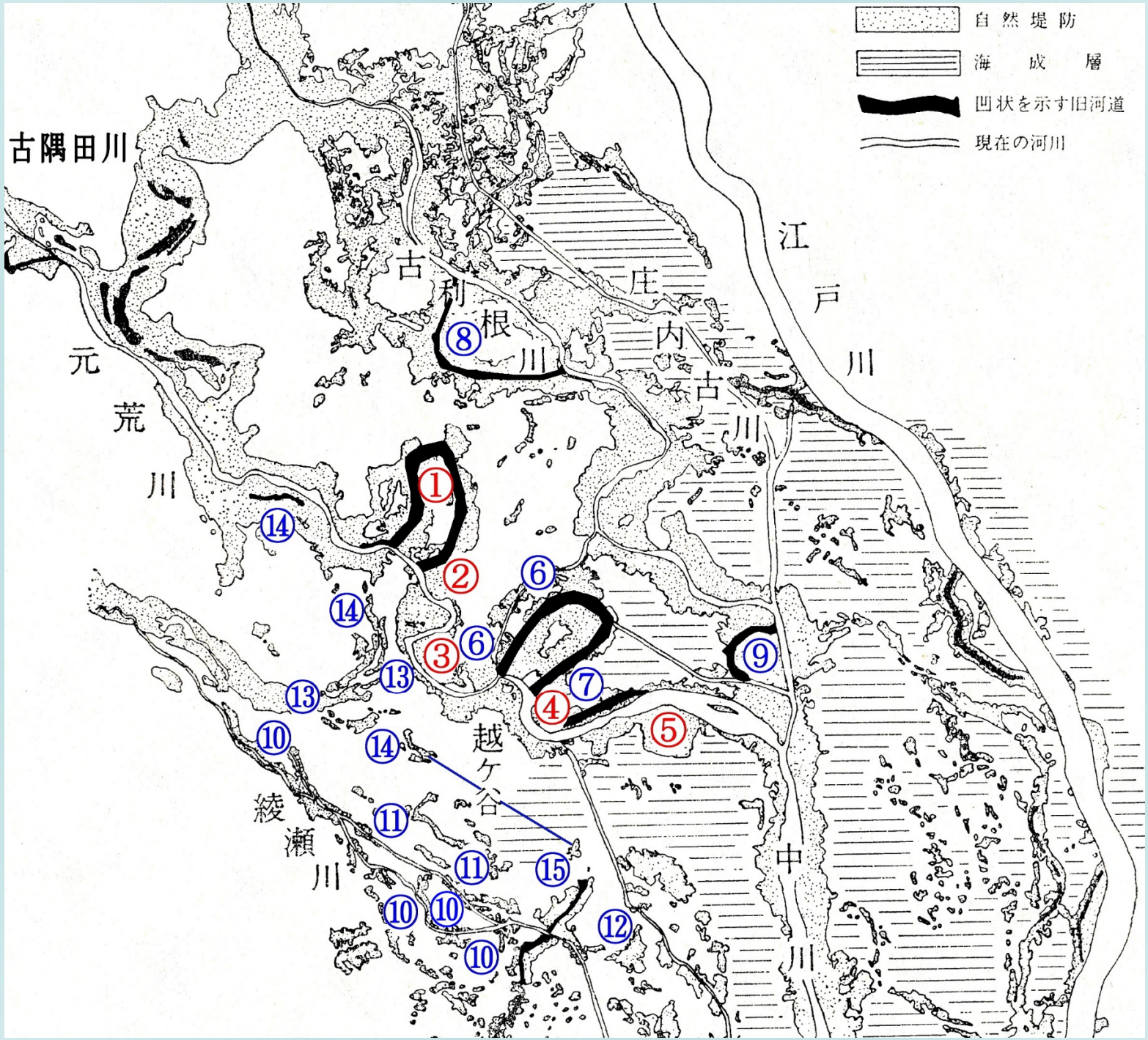
四・弥生文化におけるさいたま市の位置

農耕文化の最前線ーさいたま市

pp. 29-31

より引用

出典：
新井 鎮久(1975)
「第16図
中川水系流域(中流部)における
自然堤防の分布
(国土地理院洪水地型分類図による)」
『越谷市史 第一巻 通史上』
越谷市役所 p. 52
より引用・加筆


自然堤防
海成層
凹状を示す旧河道
現在の河川
古隅田川
元荒川
古利根川
庄内古川
江戸川
中川
綾瀬川
越ケ谷
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮

出典：

新井 鎮久(1975)

『越谷市史 第一巻 通史上』

越谷市役所 pp. 52, 53-54, 56, 57-58

より引用

新井 鎮久(1975)
1/5

綾瀬川筋では河道全般の移動が、自然堤防の配列状況より認められる。

大宮ー岩槻台地間の谷幅に限定されていた河道が和土南端から急に広い平野部にでたため、あたかも扇状地や三角州の河川のように、河道変更の範囲を広げたものであろう。

このうち最も顕著に認められるものは、浦和ー越谷間の県道に沿って東進し、神明下で元荒川の自然堤防に接続する自然堤防である。pp. 53–54

新井 鎮久(1975)
2/5

[略]

いずれも比高は五〇～八〇センチメートルくらいの低い自然堤防である。

このように自然堤防が低く、しかも形態は狭小かつ断続的であることから、綾瀬川がかつての荒川の本流であるといわれていることに対して、少なくとも、その期間が極めて短かったか、ないしは分流であったことが推定される。p.54

新井 鎮久(1975)
3/5

（4）小曾川から南荻島、西新井にかけてＳ字状に走る南北方向の自然堤防は、かなり火山岩残滓の含有率の高い（三〇～五五％）ものである。[略]

（4）で述べたような南荻島一西新井を経て、出羽沼の辺で消滅するものがあったと考えられる。p.56

新井 鎮久(1975)
4/5

なお、弥生時代に毛長堀（川）筋を流れていた荒川は、奈良・平安時代の前ごろには、自然堤防の分布状況からみて、綾瀬川筋から和土の台地南端部で東に大きくそれ、浦和一越谷県道沿いに、当時の利根川（現在の元荒川）に流入していたことが考えられる。

加えて、綾瀬川が荒川本流であった時期のうちでは、このコースが最も長期にわたって、河道とされていたところのようである。pp. 57-58

新井 鎮久(1975)
5/5

いわば、小曾川で分流した旧利根川の支流と旧荒川とは、西新井のあたりで交叉していたことが推定される（第18図）。p.58

仮説・越谷郷は足立郡であった
秦野 秀明 1/9

①（永禄五年（1562））戊八月二十六日
「北条家印判状」（本田文書）
の解釈である小沢 正弘(1989)（注1）
と
②柿沼 幹夫(2025)（注2）
を結び付ける
新解釈は
秦野 秀明(2025)「仮説・越谷郷は足立郡であった」
※令和7年(2025)五月九日（金）発表

仮説・越谷郷は足立郡であった
秦野 秀明 1b/9

①（注1）出典：

小沢 正弘(1989)

『八潮市史 通史編Ⅰ』八潮市役所

pp.542-543

②（注2）出典：

柿沼 幹夫(2025)

『さいたま市史 通史編 原始・古代Ⅱ』さいたま市

pp.2-7,19-26

仮説・越谷郷は足立郡であった
秦野 秀明 2/9

新解釈である

秦野 秀明（2025）「仮説・越谷郷は足立郡であった」

の仮説の概略は

①近世初頭以前の「越谷郷」は「足立郡」に所属していた

②「越谷郷」における「足立郡」と「騎西郡」の境界は

弥生時代中期頃に荻島地区（越谷市）を流れた

利根川河道跡であった

仮説・越谷郷は足立郡であった
秦野 秀明 3/9

（永禄五年（1562））戌八月二十六日当時

「越谷（ママ）郷」は

「埼西郡」であったのか？

「足立郡」であったのか？

出典：

（永禄五年（1562））戌八月二十六日

「北条家印判状」（本田文書）

出典：

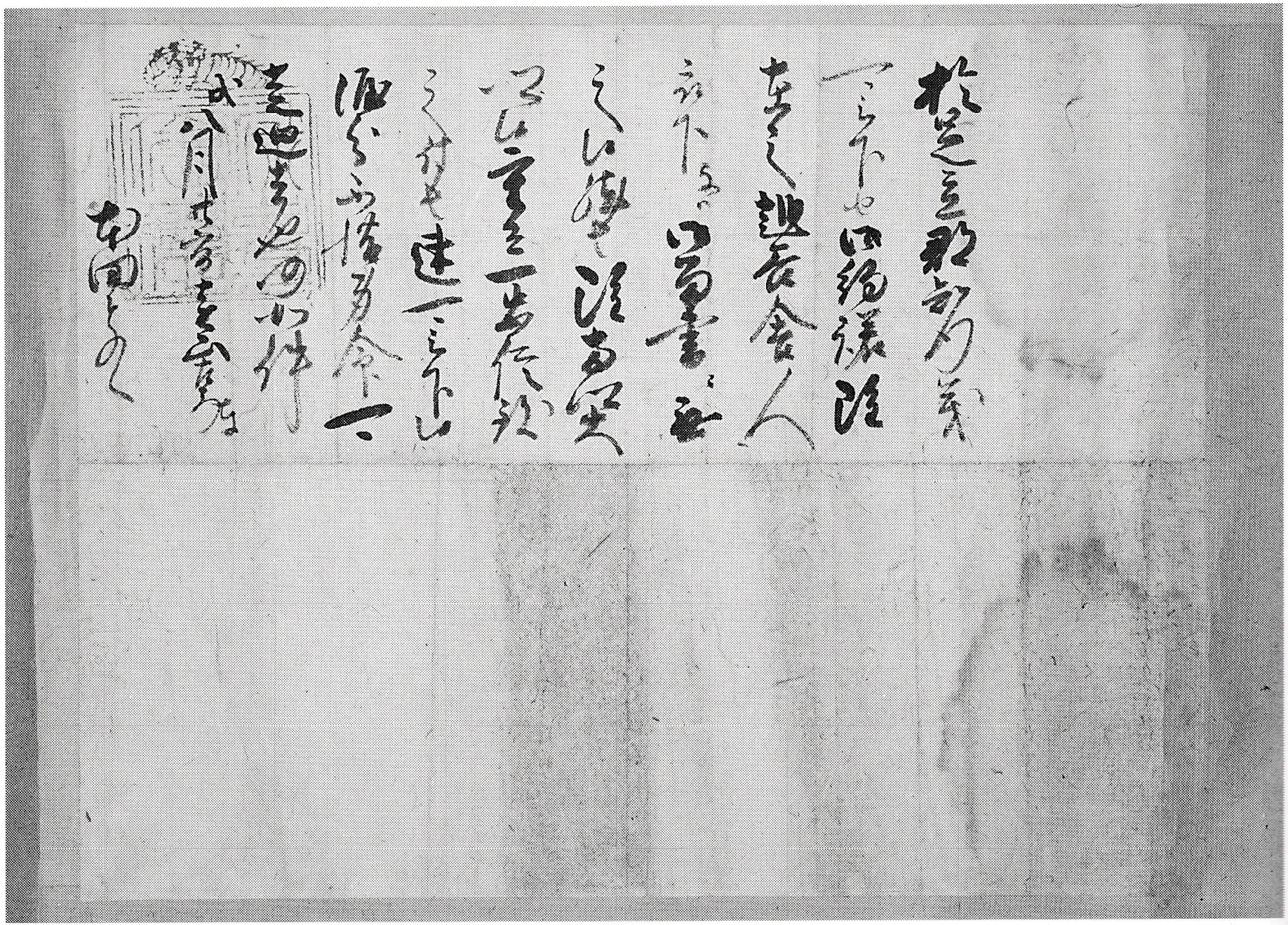
吉川市史編さん委員会編(2009)

『吉川市史 資料編 原始・古代・中世』

吉川市

pp. 389-390

より引用



254　北条家印判状（本田文書）

二五四　〔永禄五年〕（一五六二）八月二十六日

後北条氏、本田氏に足立郡内の地を知行地として与えるが、越谷・舎人については重ねての忠信によって与えるという。

北条家印判状（本田文書）

於足立郡知行義可被下由、御約諾雖在之、越谷・舎人被下与ハ御留書ニ無之候、然者雖両郷大郷候、重而一忠信致之付者、速可被下候、涯分不惜身命可走廻者也、仍如件

戌（永禄五年）八月廿六日　（虎朱印、印文「禄寿応穏」）　遠山左衛門奉

本田とのへ

〔読み下し〕

足立郡において知行義下さるべき由、御約諾これあるといえども、越谷・舎人下さるとは御留書にこれ無く候、しからば両郷は大郷候といえども、重て一忠信これをいたすについては、すみやかに下さるべく候、涯分身命をおしまず走り廻るべきものなり、よってくだんのごとし、

出典：

小沢 正弘(1989)

『八潮市史 通史編Ⅰ』八潮市役所

pp. 542-543

より引用

仮説・越谷郷は足立郡であった
秦野 秀明 4/9

ただ、八條領の地域を足立郡と表記した文書もみられる。
先述した通り天正十九年（一五九一）十一月の見田方村浄音寺宛の徳川家康の朱印状は「武蔵国足立郡大相模郷云々」とある。
入国直後で、地理不案内のため騎西郡とすべきところを足立郡と誤記したかとも考えられるが、近世において騎西郡（埼玉郡）とされた地域の一部が中世において足立郡の中に含まれていた可能性がないわけでもない。

仮説・越谷郷は足立郡であった
秦野 秀明 5/9

年号は不詳であるが、戌八月二十六日付の遠山左衛門が奉じた本田殿宛の北条家印判状に

「於足立郡知行義可被下由、御約諾雖在之、越谷・舎人被下与ハ御留書ニ無之候、然者、雖両郷大郷候、重而一忠信致之付者、速可被下候云々」という文言がある。

仮説・越谷郷は足立郡であった
秦野 秀明 6/9

これは足立郡において知行を下さるよしの約束があったが、越谷・舎人を下さるとは留書に書いてはない。
しからば、両郷は大郷であるが、重て一忠信の働きがあれば、速に両郷を下さるであろう云々というものである。
したがって、江戸時代騎西（埼玉郡）に入った越谷が北条氏時代足立郡の一部であったとうけとれる文言である。

仮説・越谷郷は足立郡であった
秦野 秀明 7/9

そうすれば、中世においては騎西（埼玉）・足立両郡の境界が近世以後の境界である綾瀬川ではなく、綾瀬川の東部にも足立郡があり、入り組んでいたもののようにも考えられる。
近世に入って下総・武蔵の国界が古利根川から江戸川へ移っただけでなく、郡界にも変更があり、騎西（埼玉）・足立の郡界が綾瀬川に移ったとも考えられるのである。

仮説・越谷郷は足立郡であった
秦野 秀明 8/9

なお、慶安元年（一六四八）九月十七日付の
八條村西勝院や大経寺宛の徳川家光の朱印状にも
「武蔵国足立郡八條村西勝院領」とか
「武蔵国足立郡八條村大経院領」とある。
また、寛文四年（一六六四）四月五日付の
忍城主阿部豊後守忠秋が八万石を宛行われた時の領地目録でも
柿木・千疋・別府・四条・南百。見田方・麦塚と伊原村の一部
の上郷八か村は足立郡の内と記載されている。

仮説・越谷郷は足立郡であった
秦野 秀明 9/9

古代・中世は下総国葛飾郡「下河辺荘新方」であった
現・越谷市北越谷地区の
近世前期を表現した「絵図」に
「氷川前」の「字（あざ）名」がある。
「氷川神社」は「足立郡」の祭祀圏に
鎮座することの多い神社である。
出典：
江澤 昭融 天保十一年（1840）
『大沢町古馬筥』

出典：

江澤 昭融

天保十一年（1840）

『大沢町古馬筥』

より引用

沢川系

位沢川神社ニ宮馬乗引毛氏

一 古絵馬ヲ沢川系トシテ所有氏ノ西ノ方ニ沢川系ト称シ居リ
ヨリ辻新氏ノ住近ヲ中心トシ多クハ古絵馬ヲ有シ

ご清聴
ありがとうございました。